

あの時、いま思いだしてもゾツとするほどだ。あれはちようど二十九日の朝九時十分ごろだったと思う。空は何を意味するのか知らないが、一面におおっていた雲がひらき、青い光がふりそそいだ。

本道通りの人たちは避難していたのにもかかわらず、朝の仕事をしに家へ帰っていった。そのとき、ゆう然とそびえ立っていた大西山が突然すごい爆音とともにくずれてきた。大地が動いたような音だった。土が木がおおいかぶさってくるような気がした。もう止まるかと思うとまだむかってくる。山におされた泥があれ狂う海の波のようないきおいでぶつかってはかえっていった。悪魔のしわざとしかいえないようなありさまだった。一瞬にして平和な村が恐怖の村になってしまった。Aのおばさんたちは清水の方へ登りながら、皆は死んでしまったといって涙を流していた。

下の方は地獄としかいえないようであった。赤いフトンが先に立ち、泥の海の中をつぎからつぎへといろんな物が流れてきた。私たちが見ている前で泥の中から人が出てきた。死人かと思った。その人は山のくずれた方へ向って、小さな子どもが歩くような歩き方をして進んでいった。こちら側からその人を呼ぶ声が聞こえた。その声が聞こえたかどうかしらないが、こちら側へむかって歩いてきた。Kのおばさんたちはむこう側の落ちた山へ登っていった。みんなは、「足がわるいのによくまあ。」といってあずきのように見える人たちを見ていた。どの人もどの人も青い顔をし、

「こんなことがこの世の中にあつていいことなのか。」などと話していた。
いま思うとただ悪夢としかいえない。

(三十六年)